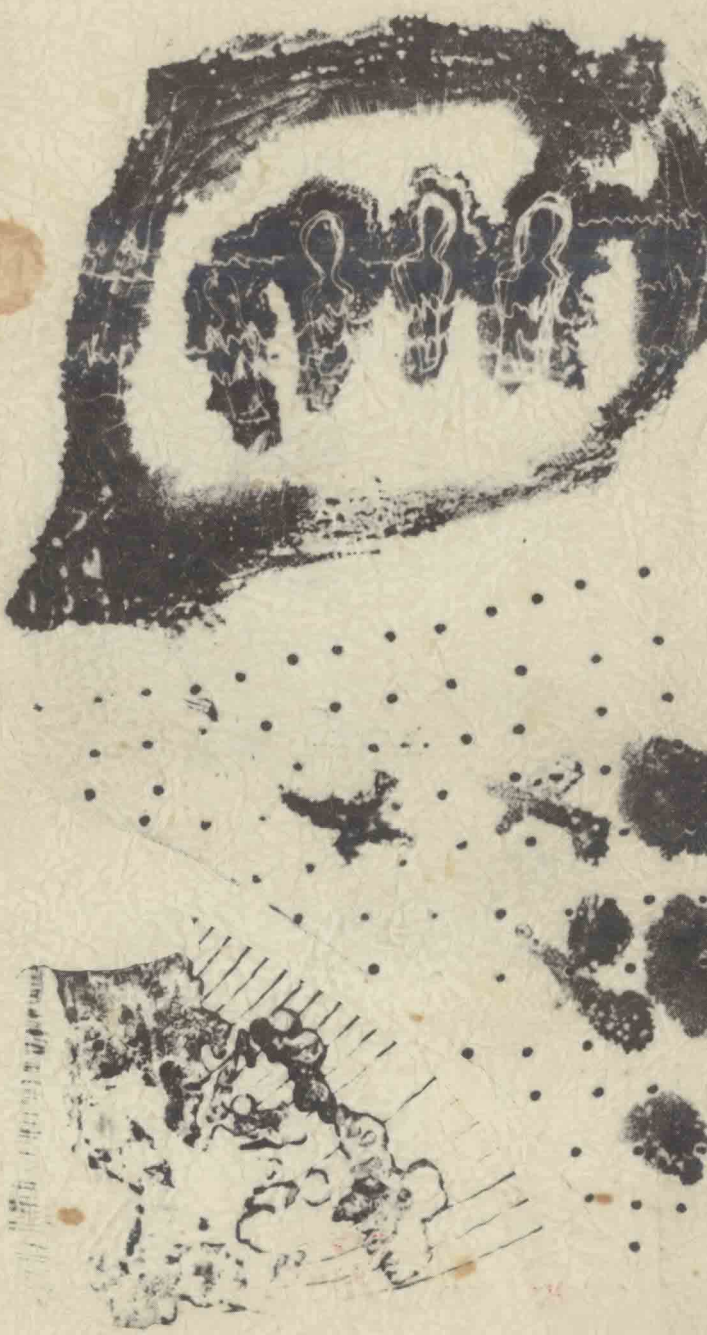
隠れ鬼

黒井千次

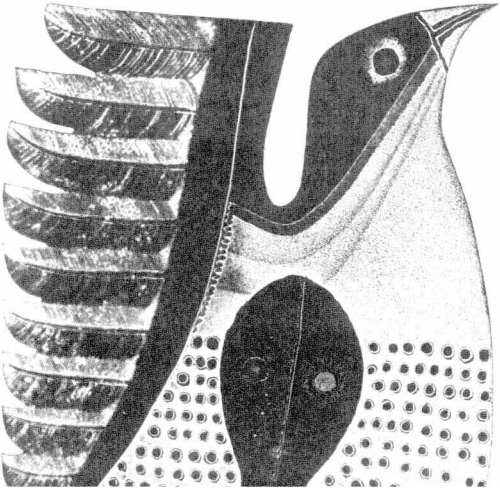


新潮社版

隠れ鬼

黒井千次

新潮社版



埼玉県立浦和図書館
除籍

隠れ鬼

一九八四年五月一〇日印刷
一九八四年五月一五日発行

著者　黒井千次
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町七一　振替東京四—八〇八
電話（業務部）03—二六六—五一一一
（編集部）03—二六六—五四一一

印刷　三晃印刷株式会社
製本　植木製本株式会社
定価　一一〇〇円

© 1984 Senji Kuroi
Printed in Japan
（乱丁・落丁本は，ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

ISBN4-10-327204-X　C0093

《目次》

隠れ鬼……3
石の話……31
樹の話……57
出発まで……85
一　夜……115
男の車……139
知らない顔……165
袋の男……183

装画　深沢幸雄

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

隱れ鬼

夜の食事が終ると妻は家出をした。

夫も息子もそれを知らなかった。

食卓から離れた妻が台所を抜けて二階へあがっていくのに夫は気がついていたが、洗濯物でも干すつもりなのだろう、というほどにしか考えなかった。

勤めに出ていた頃の習慣がそのまま抜けず、留子(とめこ)は夜のうちに物干場いっぱいに洗濯物を干す癖があった。月の明るい晩に干物を出しておくと、月光に晒されて白い下着類などは怖いほど純白になるのだ、と留子はよく言った。彼女の言葉を聴いていると、人々の寝静まった夜更け、青白い月の光が物干竿から垂れ下った下着に音もなく突き刺さり、燐光色の粉末を撒きちらしたようにシャツやスリップをキラキラと輝かせながら、生臭い繊維の束を次第に浄化していく様が眼に見えるようだった。

――私もお月夜に一晩、ベランダに出ていてみようかしら。

留子は物干台をベランダと呼びかえてそんなことも言った。

——裸でかい。
——もちろんよ。
——夜明けに僕が取りこみに行くと、どこもかも純白になっているのかね。
留子は少し考えてから、ばかね、と低い声を返した。しかしその時、暮夫の眼には、中身を失った妻の身体が両手をいっぱいに拡げてネグリジェの形で物干竿から下っている光景が痛いほどはっきりと見えていた。十字架とも首吊りとも違う留子のその姿は、崇高でもなければ無気味でもなく、なぜか哀しかった。
——ママはどこへ行った。
テレビの番組が一区切りつくと暮夫は傍らの息子に訊ねた。
——ママは？
自分が訊ねられたのに、北人は怒ったように父親に訊ね返した。
——二階かな……。
自信なげに暮夫が呟いた。
——二階だよ。
北人は父の呟きを鸚鵡がえしにすると、俄かにもとの表情に戻ってテレビの画面に帰っていく。そこでは幾人もの母親が洗剤の力にわざとらしい驚きの声をあげたり、人造バターを味わったり、小さなバイクに乗って走り廻ったりしていた。
——二階でなにをしているんだろう。

しばらくして暮夫が独り言を言った。上からはなんの物音も聞えて来ない。
——洗濯物を干しているかな。
——そこにあるじゃないか。
テレビのアニメーション番組に没入しているとばかり思っていた北人が、苛立たしげに細い指で台所の冷蔵庫の方を指差した。冷蔵庫の前に、脱水した洗濯物をいれるプラスチック製の容器がぽつんと置かれていた。洗い終えられたらしい白い衣類がその容器に山盛りに溢れている。
——ママを捜しに行くか。
眼をつぶって百まで数えた鬼が隠れた相手をみつけ出しにいく時の口調で暮夫は半ば自分に呼びかけた。
——うん。
意外に敏感に北人が答えた。ソファーから立上った父親につと身を寄せてその手を強く握った。まだテレビの画面に眼だけを残して階段の方にそろそろと歩きはじめた北人は、母親を捜してみたいのか、居間に一人で留まるのがいやなだけなのか、そのあたりがはっきりしない。
それでも、片足が階段にかかると北人の表情は急に澄んで二階を見上げる眼に力が光った。
——どこに隠れていると思う?
狭い階段を並んであがっていきながら、暮夫は遊びの声を盛りあげた。
——変な所かもしれないね。
大人びた顔つきで北人が答える。

——変なって？

——……。

——花瓶の中とか、本棚の裏側とかかい。

北人は父親の子供じみた思いつきをばかにするように首を横に振った。それなら、と暮夫が言いかけた時に二人はもう階段を昇り切っていた。短い廊下の端で父と息子は立停った。二階はしんと静まりかえっている。

——コラア　オマエタチ　ナニシニキタァ。

静寂の壁を破って、作られた太い声と共に留子が廊下に転がり出る様がすぐそこに用意されているような気がした。両手を高くかかげ、背丈までもいつもより大きくなった妻が、見開いた眼に悪戯っぽい色をみなぎらせて二人に襲いかかって来る。

——いないよ……。

聞えたのは北人の心細げな声だった。

——捜しもしないで。

暮夫は息子を窘めた。彼には北人の気弱な態度が腹立たしかった。

——音がしないもの。

——音も隠れているんだ。

耳を澄ますと、つけたままにして来た階下のテレビの音が伝わってくる。大きな鍋で空気がシチューみたいに煮られているような音だ。階下に音があるだけ、二階の沈黙は一層分厚いものに

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

思われた。

暮夫は北人の手を引いて廊下を二、三歩進んだ。掌から抜け出ようと抵抗する息子の手を彼は固く摑んで放さなかった。

妻がそこにはいないらしい、ということは暮夫にもすぐに感じとれた。二階の空気は死んでいた。

壁のスイッチを押して明りをつけ、足を踏みいれた部屋は冷え冷えと乾いていた。無駄とは知りつつも、息子の手前、暮夫は掛け声をかけて四畳半の押入れを開いてみたりした。唐草模様の風呂敷の間から、新婚当時に使っていた厚手のピンクの敷布団の一部がぼってりとはみ出していた。あまりかさばって押入れへの出し入れが面倒なのでいつかしまいこんでしまったのだが、久しぶりに見るとそれは豊潤な肉に似ていた。

二間きりの四畳半のどちらにも妻の姿はなかった。

——あとは、ここだよな。

一番大切な場所は後まわしにしてとっておいたのだ、と言いたげに暮夫は廊下に引かれている雨戸の前に立った。

——そんなとこ、いないよ。

——わからんぞ。

暮夫はそっとガラス戸をあけ、トタン張りの重い戸の桟に指をかけた。

雨戸の外には一塊(ひとかたまり)の夜があった。暗い空を背景に、四本の物干竿だけが所在なげに並んでいる。

——月はないのか……。

スリッパをつっかけて干場に出ながら、暮夫は身体の奥でほっとしていた。もしも妻のネグリジェが一枚、腹を開かれた皮のようにそこに垂れていたらどうしよう、という恐れが、半分は冗談として、後の半分はひどくなまなましい感触で彼の内に動き出していたからだ。

——寒いよ。

雨戸の間から顔だけをのぞかせた北人の言葉が白い息になって見えた。

——これからお月様が出るのかな。

狭い物干場の中央に立って暮夫は空を見上げた。まだ熟しきっていないひ弱な夜空は雲に覆われているらしい。月の出が何時頃であるのか暮夫は知らなかったが、これではもし月が昇っていたにしても雲に遮られてその姿をみつけることはむずかしいだろう、と思われた。

道を隔てた向いの家の風呂場に明りがついている。おかあさん、と呼ぶ子供の高い声が窓越しに聞えてくる。なにか答えるこもった声が家の奥に起ったようだった。あの家にはいま、どうやら母親がいるらしい。暮夫は物干場への出口に立っている北人を振り向いた。

——ほら……。

息子は雨戸の横で父親に人さし指を立ててみせた。指は曖昧に空をさしている。

——なんだ？

息子が発見したものを確かめようと暮夫は夜空に眼をやりながら相手の傍に近づいた。

——聞えるでしょう？

北人は小さな白い息を吐いて首をかしげた。

——電車だよ。ほら駅に停った。……放送しているじゃない。ピリピリが鳴って……ドアが閉まって、発車……。

息子の耳は、星の巡る遙かな天体の響きでも、前の家の風呂場の物音でもなく、バス通りの先にある電車の駅の気配を聴き取っていた。いつもはそれほどはっきり聞えないのだが、風向きのせいか急に駅のざわめきの近々と寄ってくることがある。あまり風があるとも感じられないのに、今夜はプラットフォームを歩く人々の足音まで一つ一つ伝わって来そうだった。

——あの電車に乗ったかもしれないね。

——誰が。

——ママがさ。

——ママが？　どうして。

——二階にいなかったじゃない。

——二階にいなければ電車に乗っているのか。

——そうだよ。

——なぜ。

——なぜでも。

暮夫は息子の身体を押し戻して物干場から廊下におりると重い雨戸をたてた。密閉された戸の内側に家がふくらみあがった。そのどこにも妻のいる気配は感じられなかった。

北人の言った通り、留子はその電車に乗っていた。上りの東京行きだった。ラッシュアワーは終っているし、郊外から都心に向う電車であるし、特に隣の駅が始発の車輛であったため、車内は頼りないほど乗客が少なく、ゆっくり腰をかけることが出来た。車掌の吹き鳴らす笛の音が空いた車内に滲みるように細く響いた。ドアが大袈裟な音をたてて閉まり、電車はごとんと揺れて動き出す。

ふだん着の上に薄いコートを羽織っただけの身仕度だったが、ほとんど寒くはなかった。駅まで足速やに歩いたせいかもしれない。八百忠の前を通った時、店を片づけかけていたおかみさんが中からとび出して来て、お金をもらっているのに白菜を届けるのが遅くなってすまないね、と大きな声をかけてよこした。いいのよ、いいのよ、と手を振って店の前を小走りに過ぎた。売り物の菜葉の屑で飼われている白と灰色の小さな兎が、店の床に後肢で立って驚いたようにこちらを見ている様がちらと眼に残った。

駅前のデパートの横に置かれた自転車はかなり数が減っていた。ポストの脇には焼栗屋が店を出していた。バスを待つ人の列が長かった。

百円分だけの切符を買って改札口を通った。無意識に上り方面のプラットフォームへの階段を降りていく。滑りこんで来た人影のまばらな電車のドアが開くと乗りこんだ。長いシートの端に腰をおろし、コートの襟を立てて足を組んだ。なんとなく学生時代に帰ったような気分が身体の奥に動いた。

――自由のオヤだわ。

留子の口をついてふと言葉が出た。高校の終り頃に女生徒の間で流行った言いまわしだった。強調したい語の下になんでも〈オヤ〉をつければいいのだった。私、いま、悲しみのオヤよ。あの人、美しさのオヤだな。これは寒さのオヤだァ。今日は寝不足のオヤなんだ……。

空いているためか、電車はよく揺れた。転轍機を踏み越えて車体が急激に傾ぐ時、摑む人もない吊革が端から端まで一斉に揺れて気持ちよく編み棚のパイプを打った。

留子の斜め前の座席で、黒いダスターコートを着たひとりの男が足を踏ん張り、その膝にのせたショルダーバッグの上に厚い本を開いて読んでいる。ポマードをつけた髪が綺麗に分けられ、俯きかげんの顔には細い銀縁の眼鏡がかけられている。勤め帰りのようだが、どんな仕事をする人なのか。幾つもの職業を男の上にかぶせたり脱がせたりしてみているうちに、相手の姿が留子の眼の中でいきなり別の形をとりはじめた。彼女の記憶の内にあるひとりの高校生へと男はたちまち自らの姿を変えた。

――境さん。境さんじゃない？

留子の視線に気づいたらしく膝の本からふと顔をあげた男に、彼女は躊躇(ためら)わずに声をかけた。

――あれ……。

男は昔と同じように、その変化が逐一追えるほどゆっくりと顔の表情を動かしてから留子の旧姓を口にした。

――お勤めの帰り？

——うん。貴女も？
——私は、出て来たところ。
——どこまで行くの。
——まだ、わからない。
境は留子の顔を見上げてから不思議そうに眼鏡の奥の眼をしばたたいた。それでも紀伊國屋の包み紙でカバーをした厚い本を閉じると、横に来るように素振りで示した。
境が高等学校の教師になっているのは滑稽だった。黒板の前の教師にねちねちとからみつき、相手を立往生させるのが境のなによりの特技だったのだ。けれど彼の場合、それが教師を困らせてやろうとする意図に発するのか、それとも無器用なほどひたすら勉学に打ちこんでいる結果そうなるのか、そこの判定が誰にもつかなかった。
——前のままだね。
境はシートから身を乗り出し、横に座った留子を無遠慮に見廻して言った。
——嘘。あの頃はこんなに皺がなかったわ。境さんもお世辞を言うようになったのね。
——僕、太ったでしょう。
境は両手を拡げてみせた。痩せて小柄な少年であった高校時代を思い出すと、彼がいま太ったことを誇らしげに語るのがおかしかった。
まるで二人きりで坐っている応接室のように白い光の溢れた清潔な車内を、前の方からよろけながら近づいて来る長身の男があるのに留子は気がついた。酔払いかと思ったが、左右の吊革を

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.